

<資料>

2013年における流通科学大生の喫煙行動

Smoking Behavior of UMDS Students in 2013

中島 孝子*

Takako Nakashima

喫煙は多くの場合若年時に開始される習慣である。本論では、大学生の喫煙行動の実態調査を目的として流通科学大生を対象にアンケート調査を行った。喫煙経験率は全体で33.0%であり、男性については、大学生を対象とした他の調査結果に比べ概ね高い。家族に喫煙者がいる場合「父」がたばこを吸う割合が高い。家族に喫煙者がいないことと喫煙経験の有無は関連する。最初の一本を吸った時期として「高校1年」の割合が高い。

キーワード: 大学生、喫煙行動、喫煙経験率、最初の1本を吸った時期

I. はじめに

喫煙という「習慣」の多くは若年時に開始される。荻輪他¹⁾によれば、喫煙という習慣を始めるかどうかは主として20歳代前半までの若年者の問題である。実際、中尾他²⁾は大学1、2年生を対象とする調査結果において、毎日たばこを吸うと回答した喫煙者のうち、18歳で習慣的喫煙を開始した者が最も多いことを報告している。また、漆坂他³⁾は大学学部生を対象とする調査結果において、喫煙者が初めてたばこを吸った年齢として、20歳の回答が最も多いことを報告している。

本論は流通科学大生を対象に実施されたアンケート調査の結果である。調査の目的は、喫煙経験の有無、最初の1本を吸った時期および現在の喫煙状況など、大学生の喫煙行動を調べることである。

以下に調査および分析結果を要約する。アンケートの回答者の平均年齢は19.1歳、喫煙経験者は全体で33.0%であり、これらの喫煙経験者が「最初の1本を吸った時期」は「高校1年」が最も多かった(20.6%)。本調査における喫煙経験率は、男性については、2009年、2010年、2011年、2012年における本学での調査結果^{4) 5) 6) 7)}(以下、2009年調査、2010年調査、2011年調査、2012年調査とする)より高い(2011年調査を除く)。いくつかの項目を取り出して統計的検定をおこなった結果、(1)たばこを吸う家族がいるかどうかと、喫煙経験の有無とは統計的に有意な関連があった。(2)喫煙経験者の現在の喫煙量と、最初の1本を吸った時期には統計的に有意な関連はみられなかった。

以下では、Ⅱ節でアンケート結果の概略を、Ⅲ節で分析および考察を、Ⅳ節でまとめを述べる。

Ⅱ. アンケート結果

アンケートは、大学1、2年生を主な対象とする講義の受講者に対して、講義の初日（2013年4月）に匿名自記式質問紙調査によっておこなった。質問は全部で16問あり、喫煙経験ありの者と喫煙経験なしの者とで一部質問が異なる。アンケートの回答用紙を返却した人数は135人、うち103人分を有効回答としてデータの集計対象とした⁸⁾。

有効データ数103のうち、男性91人（88.3%）、女性12人（11.7%）である。回答者の平均年齢は19.1歳で、2012年調査（19.1歳）と同じである。回答者を年齢別にみると、多い順に18歳（43.7%）、19歳（27.2%）、20歳（13.6%）、21歳（11.7%）である。

家族の喫煙状況について複数回答で質問した結果を表1にまとめた。家族の中では「父」が吸うと答えた者が最も多い。「父」が吸っている者の割合は、2012年調査の38.5%から38.8%にわずかに増加している。以下「母」、「兄」、「祖父」の順となる。家族は「誰も吸わない」と回答した者は全体の48.5%で、2012年調査よりも増加した。

喫煙経験者は全体の33.0%で、男女の内訳は表2のとおりである。喫煙経験者とは、アンケート調査日までに1回でもたばこを吸ったことがある者である。回答者全体、および男性の喫煙経験率は2012年調査よりも増加した。一方、女性については、喫煙経験率はゼロであった。

表1. たばこを吸う家族（複数回答）

	人数（2013）	割合（2013, %）	割合（2012, %）
父	40	38.8	38.5
母	14	13.6	10.0
兄	13	12.6	12.0
祖父	10	9.7	10.5
祖母	4	3.9	1.5
姉	3	2.9	3.0
弟	2	1.9	1.5
妹	0	0.0	2.0
その他	3	2.9	2.0
誰も吸わない	50	48.5	46.0

表2. 喫煙経験者の人数と割合

	人数（2013）	割合（2013, %）	割合（2012, %）
全体	34	33.0	23.5
男性	34	37.4	27.4
女性	0	0.0	9.3

喫煙経験者 34 名に対して、「最初の 1 本を吸った時期」について質問した。図 1 を見ると、2012 年調査と同様、小学校や中学校など比較的 low 年齢の時期に最初の 1 本を吸っている者が存在する。本調査では、「小学校」から「中学 3 年」までの間に 6 割以上が最初の 1 本を吸っている。ただし、最初の 1 本を吸った時期として本調査で最も割合が高いのは、「高校 1 年」である (20.6%)。「高校 2 年」と「高校 3 年」でいったん割合が低くなった後、「高校以降」に最初の 1 本を吸った者の割合が増加する。2012 年調査と比較すると、「中学 1 年」、「中学 3 年」および「高校 1 年」で増加し、「中学 2 年」、「高校 3 年」および「高校以降」で減少している。

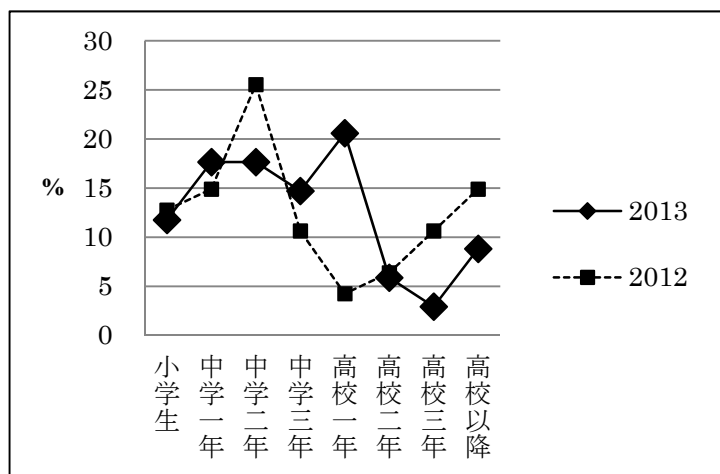


図 1. 最初の 1 本を吸った時期

表 3. これまで吸った本数の合計 (喫煙経験者)

	人数 (2013)	割合 (2013, %)	割合 (2012, %)
100 本を超える	24	70.6	70.2
100 本を超えない	10	29.4	29.8
合計	34	100.0	100.0

表 4. 現在の喫煙量 (喫煙経験者)

喫煙量	人数 (2013)	割合 (2013, %)	割合 (2012, %)
1 1 日 21 本以上	4	11.8	0.0
2 1 日 11~20 本	12	35.3	31.0
3 1 日 1~10 本	6	17.6	27.6
小計	22	64.7	58.6
4 週に数本程度	1	2.9	6.9
5 月に数本程度	0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	2	5.9	13.8
7 吸ったことがある程度で習慣ではない	9	26.5	20.7
合計	34	100.0	100.0

喫煙経験者に対して、これまで吸った本数をあわせると100本を超えるかどうかを尋ねた。この質問は喫煙が習慣となっているかどうかの目安の一つとなる。これまで吸った本数が100本を超えている場合、現在または過去に喫煙が習慣となっている（いた）者といえる。表3をみると喫煙経験者の7割が「100本を超える」と答えた。この割合は2012年調査と同程度である。

同時に喫煙経験者に対して現在の喫煙量を尋ねた（表4）。最も多いのは、喫煙量が「1日11～20本」である（35.3%）。次に「吸ったことがある程度で習慣ではない」（26.5%）という回答が多く、続いて「1日1～10本」（17.6%）および「1日21本以上」（11.8%）という回答が多かった。毎日吸っている者は平均的に2日に1箱程度消費しており、さらに毎日喫煙している者（カテゴリー1～3）の喫煙経験者に占める割合は6割を超える。喫煙量に関する傾向を2012年調査と比較すると、喫煙量が「1日11～20本」および「1日21本以上」である者の割合が増え、「1日1～10本」である者の割合が減少している。さらに毎日喫煙している者（カテゴリー1～3）の割合が増加している。また、2012年調査よりも、「週に数本程度」「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」（カテゴリー4、6）の割合が減少し、「吸ったことがある程度で習慣ではない」（カテゴリー7）の割合が増加している。

ここで、回答者を喫煙経験および喫煙量に応じて2タイプに分ける。1つ目は、喫煙量のカテゴリー1～6に含まれる者である。これを「喫煙者」と定義する。2つ目は、喫煙量のカテゴリー7に含まれる者および喫煙未経験者である。これを「非喫煙者」と定義する。

非喫煙者（合計78人）に対して、たばこを吸わない理由を複数回答で尋ねた。最も多いのが「健康のため」（74.4%）、次に多いのが「たばこの値段が高い・お金がもったいない」（67.9%）という回答であった（表5）。

表5. 喫煙をしない理由（非喫煙者、複数回答）

喫煙をしない理由（複数回答）	人数（2013）	割合(2013, %)	割合(2012, %)
健康のため	58	74.4	73.8
たばこの値段が高い・お金がもったいない	53	67.9	17.7
たばこが嫌い（におい、味）	43	55.1	32.3
人の迷惑を考えて	23	29.5	64.6
機会がなかったから	10	12.8	50.0
その他	5	6.4	19.5

表6. 5年後の予想

	喫煙者			非喫煙者		
	人数 (2013)	割合 (2013, %)	割合 (2012, %)	人数 (2013)	割合 (2013, %)	割合 (2012, %)
5年後にたばこを吸っている	14	56.0	55.6	0	0.0	1.2
5年後にたばこを吸っていない	11	44.0	44.4	78	100.0	98.8
合計	25	100.0	100.0	78	100.0	100.0

回答者全員に対して2つの質問をした。1つは、「5年後にたばこを吸っているかどうか」、2つめは喫煙と健康に関する知識についての質問である。

表6より、喫煙者は、56.0%が5年後もたばこを吸っていると予想しているのに対し、非喫煙者は、全員が5年後もたばこを吸っていないだろうと予想している。2012年調査と比較すると、5年後も吸っていると予想している喫煙者の割合はほとんど変化がない。

喫煙と健康に関する知識として、脳卒中、肺がん、食道がん、胃がん、心筋梗塞、膀胱がんの6種類の疾病を挙げ、その中で喫煙者の死亡確率が非喫煙者の10倍以上であるものを選ばせた。6つの疾病のうち死亡確率に10倍の差があるのは肺がんと食道がんである⁹⁾。正しい選択肢を選べば1点を与え、正しくない選択肢を選ばなかった場合も1点を与えて、最高得点を6点とした。全体で平均は4.0点である。得点分布は4点をピークとする分布となっている(表7)。2012年調査と比較すると、ピークがやや右に寄った分布となっている。

2010年10月、たばこ消費税が増税された¹⁰⁾。増税に伴い、たばこ価格は値上げされ、銘柄にもよるがたばこ1箱あたり(20本入り)で300円前後だったものが、およそ400円前後となった^{11) 12) 13)}。この事実について知っているかどうか尋ねたところ、103人の有効回答者のうち、「知っている」が97人、「知らない」が6人であり、ほとんどがたばこ価格の値上げについて知っていた(94.2%)。

表7. 喫煙と健康に関する知識の得点分布(全員)

得点	人数(2013)	割合(2013, %)	割合(2012, %)
1	1	1.0	0.0
2	11	10.7	18.0
3	20	19.4	23.0
4	34	33.0	29.5
5	28	27.2	25.5
6	9	8.7	4.0
合計	103	100.0	100.0

表8. たばこ価格が変化した場合の喫煙量(全員)

喫煙量	人数				割合(%)			
	たばこ1箱(20本)の価格				たばこ1箱(20本)の価格			
	200円	600円	800円	1000円	200円	600円	800円	1000円
1 1日21本以上	7	1	1	1	6.8	1.0	1.0	1.0
2 1日11本~20本	10	5	3	3	9.7	4.9	2.9	2.9
3 1日1~10本	5	11	6	3	4.9	10.7	5.8	2.9
4 週に数本程度	2	2	3	4	1.9	1.9	2.9	3.9
5 月に数本程度	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、 気が向いたときだけ	7	2	3	4	6.8	1.9	2.9	3.9
7 吸わない	72	82	87	88	69.9	79.6	84.5	85.4
合計	103	103	103	103	100.0	100.0	100.0	100.0

最後に、仮想的な質問として、たばこ1箱（20本入り）の価格が200円、600円、800円、1000円になった場合における喫煙量を回答者全員に尋ねた（表8）。たばこ価格が低い場合（1箱200円）に比較して、600円、800円、1000円と価格が上がっていくにつれて、「吸わない」（カテゴリ7）と答える者が増加する。また、「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」（カテゴリ6）という回答は、200円の場合に比較して600円でいったん減少するが、800円で増加に転じる。さらに「毎日吸う」（カテゴリ1~3）という回答者の割合の合計は価格の上昇にしたがい減少する。ただし、「1日21本以上」および「1日11本~20本」（カテゴリ1、2）については価格の上昇につれて回答者の割合は減少または横ばいとなるのに対し、「1日1~10本」（カテゴリ3）については200円から600円にかけて増加した後、800円で減少する。上記の結果は、たばこ価格が仮に1箱（20本）あたり1000円まで上昇しても喫煙者はゼロにはならないが、価格の上昇が喫煙者の喫煙量を減少させる可能性があることを示唆していると考えられる。

Ⅲ. 分析および考察

1. 喫煙経験と家族の喫煙状況

家族の喫煙状況を喫煙経験の有無別にみると、家族のうち「誰も吸わない」と答えた者の割合は喫煙未経験者のほうが高い。つまり、家族の喫煙状況について、喫煙経験の有無と関連があると考えられるのは、「誰も吸わない」という項目である。そこで、家族の喫煙状況について「誰かが吸う」か「誰も吸わない」かに注目し、表1と表2からクロス集計表を作成した（表9）。

家族が「誰も吸わない」ほど喫煙経験がないと予想される。帰無仮説を「喫煙経験と家族に喫煙者がいるかどうかとは関連がない」として、独立性の検定をおこなった。その結果、帰無仮説は棄却され、喫煙経験の有無と家族に喫煙者がいるかどうかは関連しているといえる（ χ^2 乗検定、有意水準0.05）。

表9. 喫煙経験別のたばこを吸う家族

	喫煙経験あり（人）	喫煙経験なし（人）	合計
家族の誰かが吸う	22	31	53
家族は誰も吸わない	12	38	50
合計	34	69	103

2. 喫煙経験者における最初の1本を吸った時期と現在の喫煙量

ここでは、喫煙経験者を喫煙量に応じて2タイプに分ける。1つ目は、喫煙量のカテゴリ1~3に含まれ、毎日喫煙している喫煙経験者である。これを「日常的な喫煙者」と定義する。2つ目は、喫煙量のカテゴリ4~7に含まれ、たまに喫煙をする、または現在は喫煙をしない喫煙経験者である。これを「日常的でない喫煙者」と定義する。さらに、最初の1本を吸った時期を「小

学校」「中学校」「高校」「高校以降」の4つに集約する。

日常的な喫煙者および日常的でない喫煙者それぞれについて、最初の1本を吸った時期を集計すると表10ようになる。

本調査における2つのタイプの喫煙経験者を比較すると、日常的な喫煙者は「中学校」で、日常的でない喫煙者は「高校」で初めて吸ったことがある者が多い。ただし、「小学校」で初めて吸った者の割合は日常的でない喫煙者のほうが高い。本調査では、日常的な喫煙者と日常的でない喫煙者との間に初めて吸った時期に関し異なる分布が観察される。そこで現在の喫煙量と最初の1本を吸った時期の関係について、帰無仮説「日常的な喫煙者と日常的でない喫煙者で最初の1本を吸った時期は同じである」のもとで独立性の検定を行った。カイ二乗検定の結果、帰無仮説は棄却され、「日常的な喫煙者と日常的でない喫煙者のあいだで最初の1本を吸った時期が異なる」とはいえない」という結論を得た(有意水準0.05)。2012年調査においても同様の結果を得ている。

一方、2012年調査と比較すると、日常的な喫煙者では「小学校」および「中学校」で初めて吸った者が増加し、「高校」と「高校以降」で初めて吸った者が減少した。日常的でない喫煙者では、「高校」で増加、「小学校」、「中学校」および「高校以降」で減少した。

表10. 最初の1本を吸った時期

最初の1本を吸った時期	2012				2012	
	日常的な喫煙者(人)	日常的でない喫煙者(人)	日常的な喫煙者(%)	日常的でない喫煙者(%)	日常的な喫煙者(%)	日常的でない喫煙者(%)
小学校	2	2	9.1	16.7	6.7	23.5
中学校	13	4	59.1	33.3	53.3	47.1
高校	5	5	22.7	41.7	23.3	17.6
高校以降	2	1	9.1	8.3	16.7	11.8
合計	22	12	100.0	100.0	100.0	100.0

3. 喫煙と健康に関する知識

喫煙者而非喫煙者について、喫煙と健康に関する知識についての質問に対する得点の平均値はそれぞれ3.7点と4.1点である。得点の分布は図2のとおりである。喫煙者の得点分布は3点をピークとする単峰型の分布であるのに対し、非喫煙者の得点分布は4点をピークとする単峰型分布を示している。得点分布は、喫煙者については2012年調査とは異なり2峰型から単峰型に変化しており、また、2013年のほうがピークにおける高さが高くなっている。非喫煙者については、2012年に比較して、ピークが4点である点は同じであるが、分布がやや右寄りとなっている。

一方、マークした病気の数を比較したところ、図3のような分布となった。マークした病気の数が多いほど、その回答者はより多くの病気が喫煙と関連すると考えていることが推測できる。本調査における喫煙者がマークした病気の数として、2個および6個の割合が最も高く、平均は

3.0個である。非喫煙者の場合は、マークした数が2個、3個および6個をピークとする分布となっており、平均は2.6個である。図3において本調査と2012年調査の分布を比較すると、2013年において喫煙者がマークした病気の個数の分布は、2012年調査の3峰型から2峰型に変化していることが観察される。非喫煙者の場合には2012年調査と比較してマーク数が少ない者（0～2個）の割合が増加し、マーク数の多い者（4～6個）の割合が減少して、分布はやや左寄りとなっている。

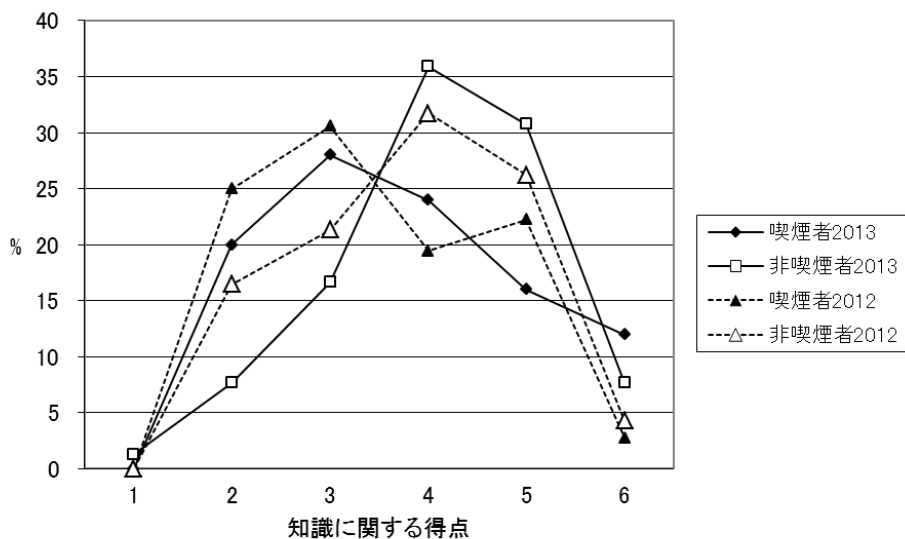


図2. 知識に関する得点分布 (2013 および 2012)

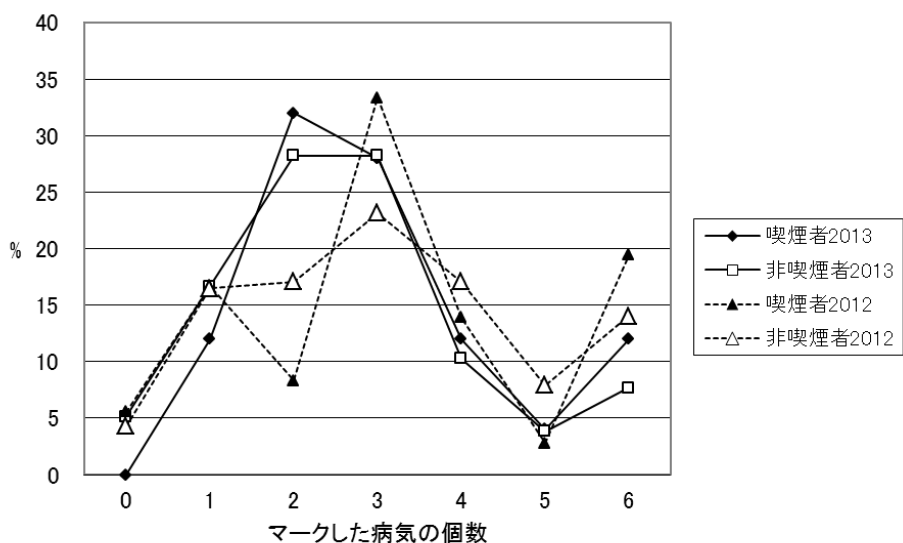


図3. マークした病気の数 (2013 および 2012)

表 11. 喫煙者の喫煙量と禁煙希望の有無

喫煙量	禁煙希望あり			禁煙希望なし		
	人数 (2013, 人)	割合 (2013, %)	割合 (2012, %)	人数 (2013, 人)	割合 (2013, %)	割合 (2012, %)
1 1日21本以上	2	12.5	5.3	2	25.0	11.8
2 1日11～20本	10	62.5	36.8	2	25.0	17.6
3 1日1～10本	2	12.5	52.6	3	37.5	41.2
4 週に数本程度	1	6.3	0.0	0	0.0	0.0
5 月に数本程度	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	1	6.3	5.3	1	12.5	29.4
合計	16	100.0	100.0	8	100.0	100.0

4. 喫煙者の喫煙量と禁煙希望の有無

喫煙者に対して、禁煙希望の有無を尋ねたところ、24人中16人が禁煙を希望し、8人は希望しないと答えた（表11）。2012年調査に比較して、日常的な喫煙者において禁煙希望ありの割合が減少し、禁煙希望なしの割合が増加している。

表 12. これまでの喫煙量が100本を超える者と超えない者の現在の喫煙量

喫煙量	これまでの喫煙量が100本を超える			これまでの喫煙量が100本を超えない		
	人数 (2013)	割合 (2013, %)	割合 (2012, %)	人数 (2013)	割合 (2013, %)	割合 (2012, %)
1 1日21本以上	4	16.7	9.1	0	0.0	0.0
2 1日11～20本	12	50.0	30.3	0	0.0	0.0
3 1日1～10本	5	20.8	48.5	1	10.0	7.1
4 週に数本程度	1	4.2	0.0	0	0.0	0.0
5 月に数本程度	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	1	4.2	12.1	1	10.0	14.3
7 吸ったことがある程度で習慣ではない	1	4.2	0.0	8	80.0	78.6
合計	24	100.0	100.0	10	100.0	100

5. 喫煙経験者：これまでの喫煙量が100本を超える者と超えない者の喫煙量

これまでの喫煙量が100本を超えているかどうかは、過去または現在における喫煙習慣の有無を判断する指標となる。表12を見ると、これまでの喫煙量が100本を超える者については、「1日21本以上」、「1日11～20本」および「1日1～10本」吸っている者（カテゴリー1～3）が多く、合計で87.5%である。これらの者は現在においても喫煙が習慣となっていると考えられる。しかし、これまでの喫煙量が100本を超えていながら「週に数本程度」、「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」および「吸ったことがある程度で習慣ではない」と答えた者（カテゴリー4～7）については、かつては喫煙が習慣となっていたが、現在は喫煙をたまにしかしないか全くしなくなったと解釈できる。

本調査と2012年調査とを比較すると、これまでの喫煙量が100本を超えない者については、おおよそ分布の傾向が似ている。しかし、これまでの喫煙量が100本を超える者については変化が観察される。これまでの喫煙量が100本を超える者について、本調査では「週に数本程度」の者および「吸ったことがある程度で習慣ではない」者（カテゴリ4、7）がゼロでなくなり、「1日21本以上」および「1日11～20本」の者（カテゴリ1、2）が増加する一方、「1日1～10本」および「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」の者（カテゴリ3および6）が減少している。

なお、これまでの喫煙量が100本を超えないグループにおいてカテゴリ3に属する者については、アンケート調査実施日のほんの少し前に喫煙量が「1日1～10本」になったばかりとみなすことができる。

6. 仮想的なたばこ価格の変化と喫煙経験者の喫煙量

たばこ価格が変化すると仮定した場合の喫煙量を喫煙経験者について集計した（表13）。回答者全体の場合と同様に、喫煙経験者についても、たばこ価格の上昇に従って「吸わない」（カテゴリ7）という回答が増加する。また、「1日21本以上」および「1日11本～20本」（カテゴリ1、2）については価格の上昇に伴って回答者の割合は減少または横ばいとなるのに対し、「1日1～10本」（カテゴリ3）については600円まで増加した後、800円から減少する。

現在の喫煙量と比較したとき、価格が上昇した場合は喫煙量の多いカテゴリ（カテゴリ1～3）の割合が減少し、「吸わない」（カテゴリ7）の割合が増加する。しかし、価格が200円に下落した場合についてはそれほど単純ではない。現在の喫煙量と比較して、価格200円では「1日21本以上」（カテゴリ1）の割合が増加するが、「1日11～21本」および「1日1～10本」（カテゴリ2、3）の割合は減少する。結果として日常的喫煙者（カテゴリ1～3）の割合の合計は、価格200円においてむしろ減少する。同時に、現在の価格から200円に下落することによって「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」（カテゴリ6）の割合は増加し、「吸わない」（カテゴリ7）の割合は減少する。

表13. たばこ価格が変化した場合の喫煙量（喫煙経験者）

喫煙量	人数				割合 (%)				現在の喫煙量 (再掲)
	たばこ1箱(20本)の価格				たばこ1箱(20本)の価格				
	200円	600円	800円	1000円	200円	600円	800円	1000円	
1 1日21本以上	6	0	0	0	17.6	0.0	0.0	0.0	11.8
2 1日11本～20本	10	5	3	3	29.4	14.7	8.8	8.8	35.3
3 1日1～10本	5	11	6	3	14.7	32.4	17.6	8.8	17.6
4 週に数本程度	1	2	3	4	2.9	5.9	8.8	11.8	2.9
5 月に数本程度	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	4	1	2	3	11.8	2.9	5.9	8.8	5.9
7 吸わない	8	15	20	21	23.5	44.1	58.8	61.8	26.5
合計	34	34	34	34	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表 14. 喫煙経験率の比較

調査の種類	調査の時期	データの属性	男性	女性
本調査	2013年4月	大学生（平均年齢19.1歳）	37.4%	0%
中島（2013）	2012年4月	大学生（平均年齢19.1歳）	27.4%	9.3%
中島（2012）	2011年4月	大学生（平均年齢20.1歳）	49.0%	36.4%
中島（2011）	2010年4月	大学生（平均年齢19.1歳）	33.8%	13.6%
中島（2010）	2009年4月	大学生（平均年齢19.3歳）	35.2%	17.9%
中尾他（2007）	2002年4～7月	大学生（平均年齢19.2歳）	31.9%	6.3%
新井他（2009）	2007年11～12月	大学生（1～4年生）	17.2%	1.9%
石川・高橋（2011）	2010年6～9月	大学生1年生	26%	11%
石川・高橋（2011）	2010年6～9月	大学生2年生	37%	13%
石川・高橋（2011）	2010年6～9月	大学生3年生	39%	14%

7. 喫煙経験率の比較

本調査における喫煙経験率を男女別にみると男性 37.4%、女性 0.0%である。本調査における女性の喫煙経験率は、ゼロという極端な値をとった。これは、本調査における女性の回答者数が 12 人と少ないことがその理由である可能性がある。一方、男性の喫煙経験率は、2011 年をのぞく 2009～2012 年までの本学学生を対象とする調査結果よりも高い（表 14）。すなわち、男性の喫煙率は 2011 年をのぞき 2009 年以降は低下傾向にあったが、本調査において増加した。本調査における喫煙経験率の男性における上昇と女性における下落が、一時的なものか傾向的のものかについては、今後の調査において確認する必要がある。

本調査における喫煙経験率を、大学生を対象とする他の調査と比較する。本調査において女性の喫煙率はゼロであるので、男性のみ比較する。本調査における男性の喫煙経験率は中尾他¹⁴⁾、および新井他¹⁵⁾の調査結果よりも高く、石川・高橋¹⁶⁾における大学生 2 年生の喫煙経験率と同程度である。

IV. おわりに

本論では流通科学大生を対象に実施したアンケート調査結果を述べている。調査の目的は、喫煙経験の有無、最初の 1 本を吸った時期および現在の喫煙状況など、大学生の喫煙行動の一端を調べることである。

結果は、以下のとおりである：(1) 喫煙経験率は全体で 33.0%であった。比較の対象を男性に限ると、本調査における喫煙経験率は、本学における 2009 年調査、2010 年調査、および 2012 年調査よりも高い。男性の喫煙率は、他大学の学生を対象とした複数の調査結果に比較して高いか同程度である。(2) 回答者の家族に喫煙者がいる場合、「父」がたばこを吸う割合（38.8%）が最も高い。ただし、2012 年調査と同様、「父」がたばこを吸う割合は、家族が「誰も吸わない」割合（48.5%）より低い。また、たばこを吸う家族がいないことと、喫煙経験の有無とは統計的に有意な関連があった（有意水準 0.05）。(3) 最初の 1 本を吸った時期として最も多いのは「高校 1

年」である。次に「中学1年」、「中学2年」、「中学3年」が多い。(4) 喫煙経験者の現在の喫煙量と、最初の1本を吸った時期には統計的に有意な関連はみられなかった(有意水準 0.05)。また、日常的な喫煙者は、「中学校」(59.1%) および「高校」(22.7%) で最初の1本を吸っている一方で、日常的でない喫煙者は「高校」(41.7%) および「中学校」(33.3%) に最初の1本を吸っている者が多い。(5) 喫煙と健康に関する知識に関連して、喫煙者と非喫煙者を比較すると、得点およびマークした病気の数の分布は異なる。いずれも単峰型であるが、喫煙者の得点分布は3点をピークとするのに対し、非喫煙者は4点をピークとする得点分布を見せている。一方、喫煙者はマークした病気の数が2、6個をピークとする分布となっているが、非喫煙者は2、3、6個をピークとする分布を示した。(6) 喫煙者において、禁煙希望ありの者は禁煙希望なしの2倍であった。(7) 現在の喫煙量が多い者ほど、これまでの喫煙本数の合計が100本を超えている者が多い。(8) 2010年秋のたばこ税増税に伴うたばこ価格値上げについて、9割以上の回答者が知っていると答えた(94.2%)。(9) 回答者全員に、仮想的なたばこ価格における喫煙量を尋ねたところ、価格が上がるにつれて「毎日吸う」者の割合が減少し、「吸わない」者の割合が減少する。ただし、喫煙者については、現在の喫煙量と価格が低い場合(1箱200円)の喫煙量を比較すると、両者の違いは単純ではない。

喫煙という習慣を始めるかどうかは主として20歳代前半までの若年者の問題である。いくつかの文献^{17) 18) 19)}において、大学入学以降の喫煙開始の抑止が問題を解決する手段の一つであることが示唆されている。

仮想的な価格と喫煙量の関係を見ると、たばこ価格の値上げは、限界はあるものの、若年者の喫煙行動を変化させるのに効果があると考えられる。すなわち、若年者の喫煙開始を防止し、喫煙者の喫煙量を抑制することを目的にたばこ価格のさらなる値上げ(増税)の実施が検討されるべきである。

本調査と同様の年齢層を対象とした2009年調査、2010年調査および2012年調査と比較すると、本調査の喫煙経験率は男性においては高い。本調査における男性の喫煙率の上昇と女性の喫煙経験率ゼロの結果が一時的なものか、経年的なものかについては今後の継続的なデータ収集に基づく検討が必要である。

謝辞

アンケートに協力して下さった学生みなさんに感謝します。

引用文献、注

- 1) 箕輪眞澄・尾崎米厚：「若年における喫煙開始がもたらす悪影響」、『保健医療科学』54(4)、2005、262-277.
- 2) 中尾理恵子・田原靖昭・石井伸子・門司和彦：「未成年者に喫煙開始した若者の喫煙に関する認識とニ

- コチン依存度 — 大学生の質問紙調査から—, 『保健学研究』 20 (1), 2007, 59-65.
- 3) 漆坂真弓・高梨信吾・阿部緑・工藤誓子・三国谷忠・中村邦彦:「弘前大学学部生の喫煙状況と喫煙に対する意識調査」, 『日本禁煙学会雑誌』 5 (4), 2010, 111-119.
 - 4) 中島孝子:「2009 年における流通科学大生の喫煙行動」, 『流通科学大学論集—経済・経営情報編』 18 (2), 2010, 157-168.
 - 5) 中島孝子:「2010 年における流通科学大生の喫煙行動」, 『流通科学大学論集—経済・経営情報編』 19 (2), 2011, 121-133.
 - 6) 中島孝子:「2011 年における流通科学大生の喫煙行動」, 『流通科学大学論集—経済・経営情報編』 20 (2), 2012, 153-167.
 - 7) 中島孝子:「2012 年における流通科学大生の喫煙行動」, 『流通科学大学論集—経済・情報・政策編』 21 (2), 2013, 151-164.
 - 8) 喫煙経験者であるのに、喫煙経験のない者を対象とする質問に回答があるなどのデータを無効とした。
 - 9) 井伊雅子・大日康史:『医療サービス需要の経済分析』(日本経済新聞社, 2002).
 - 10) 財務省「たばこ税等の税率及び税収」(URL: http://www.mof.go.jp/tax_policy/summary/consumption/127.htm, 2010 年 8 月 20 日取得)
 - 11) All About ニュース「たばこ税増税 1 箱あたり 100 円以上の値上げへ」(2010 年 9 月 8 日)(URL: <http://focus.allabout.co.jp/gm/gc/290785/?from=dailynews.yahoo.co.jp>, 2010 年 8 月 31 日取得)
 - 12) 財務省「日本たばこ産業株式会社製紙巻たばこ等の小売定価変更の認可をしました」(2010 年 7 月 16 日)(URL: http://www.mof.go.jp/tab_salt/topics/20100716_press.htm, 2013 年 8 月 31 日取得)
 - 13) 財務省「フィリップ・モリス社及びブリティッシュ・アメリカン・タバコ社製品の小売定価変更の認可をしました」(2010 年 8 月 6 日)(URL: http://www.mof.go.jp/tab_salt/topics/20100806_press.htm, 2013 年 8 月 31 日取得)
 - 14) 中尾理恵子・田原靖昭・石井伸子・門司和彦:「未成年期に喫煙開始した若者の喫煙に関する認識とニコチン依存度 — 大学生の質問紙調査から—」, 『保健学研究』 20 (1), 2007, 59-65.
 - 15) 新井信成・上地勝・富樫泰一:「本学学生における喫煙行動および知識・態度に関する調査研究」, 『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』 58, 2009, 423-438.
 - 16) 石川達也・高橋薫:「大学生の健康観: 喫煙およびムンプスに対する認識: 日本福祉大学 2010 年アンケート調査からの検討」, 『日本福祉大学社会福祉論集』 (124), 2011, 27-37.
 - 17) たとえば中尾他 (2007) .
 - 18) 中井久美子・高橋裕子・清原康介・苗村郁郎・立身政信・寺尾英夫・吉原正治・杉田義郎・森山敏樹・鎌野寛・盛岡洋史・池谷直樹・辻井啓之・山形然太郎:「全国国立大学法人における喫煙対策調査(2006 年度調査)」, 『禁煙科学』 2 (4), 2008, 9-14.
 - 19) 中井久美子・高橋裕子・清原康介:「大学禁煙化プロジェクトにおける喫煙大学生への禁煙支援介入の成果」, 『禁煙科学』 2 (4), 2008, 22-28.